

クロマキー撮影



昨今の劇映画におけるCG技術の発達はめざましい。そんなCG技術の一つに「クロマキー」と呼ばれる手法がある。「クロマキー」とは、映画やテレビなどで人物とCGなどを合成する際に利用されている。映画ではブルー・バック(あるいはグリーン・バック)を背景に人物だけを撮影し、この映像のブルーの色情報をキー信号としてCGなどの他の背景と置き換える。わかりやすい「クロマキー」の撮影の例は「巨大な怪獣が登場する」ような映画か。巨大な怪獣が前方に現れ、それに仰天した人々が後退るといったような場面。撮影の際に俳優はブルーやグリーンの背景を前に「いもしない巨大な怪獣」を想定して驚くわけである。

先日、酒席で年配の俳優さんが「スタニスラフスキー・システムにおける(五感の記憶)はこういうクロマキーによる撮影の場面で大いに力を発揮するはずだ」と言っていた。なるほどと思う。「いもしない巨大な怪獣」に驚く演技は演劇の専売特許である。舞台の演技は常にこういう無対象演技を余儀なくされる構造を持っているからだ。実際にそこが海辺ではなくても、風を感じ、潮の匂いを感じる演技。実際にそこが灼熱の砂漠でなくても喉の乾きを感じ、太陽光を感じる演技。つまり、舞台の演技は口ケ地で撮影することが常だった映像の演技に比べて、かねてより大きな想像力を要求されてきたのだ。

撮影技術の科学的な発達が必要とする演技を俳優に求めることになるのは何とも皮肉であるとも言えるが、これからの映画の俳優は、舞台の演技の経験が今まで以上に強く求められる時代が来るのかもしれない。

高橋いさを

〈劇団シヨーム主宰 劇作・演出家〉